

Title	編集後記
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.457- 457
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0460">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0460</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化人類学や民俗学という学問分野は現在では、ややマイナーな領域になりつつあるようです。従来は、人類学者は、自分たちの生きている社会とは異なる生活様式を営んでいる地域に出かけて行って、文化ショックを受け、生き方や考え方の多様性を認識して、異文化の翻訳や解釈を通じてお互いを理解可能にしようと試みてきました。民俗学者は日本の多くの土地を廻り歩き、古老に会って、生きる智慧のあり方に想いをめぐらし、我々は一体何者なのか、日本人とは何かなど大きな問いに答えようとしてきました。人類学者の注目を集めたのは、どちらかというところ、エキゾチシズムやノスタルジアを喚起するような儀礼や伝承です。民俗学者の場合も、「ふるさと」として表象される原日本のイメージを髣髴させる語りや祭りで、変わりにくいとされる基層文化を「発見」することに精力を注ぎました。いわゆる「伝統的」な生活様式の研究です。

しかし、現在では世界中が緊密な情報ネットワークで結ばれ、ものの流通も加速度的に進行し、グローバル化・画一化・一元化の波が怒涛のように世界を席卷しています。秘境や奥地という言葉は死語になり、「伝統」も捏造されます。フィールドワークが人類学や民俗学の基本であるといっても、地域社会が大きく変貌し、伝承者の言説が変容した現代にあって、いわゆる古老の聞き書きは成立しなくなりました。現在は誰でもが話者であるような時代です。民族誌も『文化を書く』ことへの疑義が出て以来、信用を失墜し、変わりにくいものの提示は難しくなりました。一方、日本では市町村史

において民俗編が編纂されることが常のようですが、昔の資料の焼き直しも多く新資料は乏しいのが現状です。町村合併によって過去との連続性はますます希薄化し、地域社会の崩壊へと導かれそうです。

現在では研究者の間でも、観光やイベントの研究が増加し、在日研究や外国人労働者などの移民や、スラム・ホームレス・テキヤ・見世物などのインフォーマル・セクター、介護や福祉などの緊急の問題、PTSDや更年期などの現代医療、あるいは妖怪からアニメなどの民衆文化を扱う人々が出現しています。その一方で、民俗学の黄金時代とされる1920～30年代の学史や、その頃に遡源を持つ文化に焦点が当てられ、民俗学の時代は終わったかのようにも語られます。

こうした現状下で、人類学・民俗学は、隣接分野の社会学・福祉学・観光学・政治学などどどのように違うのか、方法論の独自性はあるのか、記述の信頼性はどうかなど、学問の存立の基盤も問われています。本特集は、これらの問いに全面的に答えているわけではありませんが、いまだに独自性や可能性はあるというメッセージを送り続けています。フィールドの面白さを他者に伝えることはなかなか困難ですが、定点観測の変化を説明・解釈したり、調査地との往復運動を通じて感情と思考の奥深さを知ることなどで人間の多様性を身体経験を通して会得し、人々の生き方を考え直す糧にするという手法はどこかに残り続けていくでしょう。さらに6年後には、新たな論集を構成できるように努力を続けたいと願っています。(鈴木正崇)